

主 題：天に国籍を持つ者**聖書箇所：ピリピ人への手紙3章17-21節、1ペテロの手紙2章11-12節**

きょうはピリピ3：17-21と1ペテロ2：11-12を通して天に国籍を持つ者ということで、一緒に学んでいきたいと思えます。

ピリピ3：17-21

- :17 兄弟たち。私を見ならう者になってください。また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。
- :18 というのは、私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。
- :19 彼らの最後は滅びです。彼らの神は彼らの欲望であり、彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです。彼らの思いは地上のことだけです。
- :20 けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。
- :21 キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。

パウロは「私たちの国籍は天にあります」と言います。それを聞いて、ある人は「いいえ、私は日本人ですから私の国籍は日本です」と言うかもしれません。またある人は、「私の国籍はアメリカです。だってアメリカで生まれ育ちましたから」と。確かにこの地上にあって私たちはさまざまな国の国民で、実際に属する国籍は違います。でもパウロは言うのです。「私たちの国籍は天にあります」と。私たちはきょう、このパウロが言う「私たちの国籍は天にあります」ということを一緒に学んでいきたいと思えます。そしてその中で天に国籍がある者とはどういう者たちなのか——。また天に国籍を持つ者——天国民と言い換えることができますが——がこの地上でどのように生きることを主なる神が求めておられるのかを見ていきます。

1. キリスト者たちへのパウロの勧め ピリピ3：17

ピリピ3：17は「兄弟たち」ということばで始まっています。3：1と3：13にも「兄弟たち」という呼びかけがあります。パウロはピリピのクリスチャンたちに注意を促しています。そして「私を見ならう者になってください」と言っています。パウロは自分が完全だから、完璧だから私を見ならえと言っているのではないことは、私たちにはすぐわかります。なぜなら17節の前の12-14節を読むと、パウロが完全、完璧な人間ではなかったことがよく記されています。「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕えようとして、追求しているのです。そして、それを得るようにとキリスト・イエスが私を捕えてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕えたなどと考えるではありません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。」とあります。

1) 「目標をみざして一心に走っているのです」 14節

「目標をみざして一心に走っている」、今、競技者で言うならばゴールを目指して走っている、そのような者なのだとパウロは言うのです。私たちはパウロがどのような生き方をしていたのか、この3章から少し知ることができます。パウロは3：14で「目標をみざして一心に走っている」と言っています。1コリント9：26では「私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません。」と言います。そんな闇雲な走り方はしていません、しっかりと決勝点を見て、ゴールを見て走っていますとパウロは言います。どの競技者でもスタートしたらゴールを目指して一心に走ります。パウロも自分はそのような者だとここで言っています。

2) パウロは、イエス・キリストを見ならっていた

また、パウロは1コリント11：1で「私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。」とも言っています。パウロはあるひとりの人物を見ならっていました。それはイエス・キリストです。パウロはこのイエス・キリストを見ならって自分の人生を歩み続けていた。だからパウロが「私を見ならってください」と言ったことばの中には、天を目指し、またキリストを見ならって歩いている自分の生き方、歩み方を模範としてほしいという意味が込められていて、それをピリピの愛する

者たちに願ったのです。私たちもパウロと同じように、「私を見ならってください」、私を見ならって信仰生活を歩んでくださいと言うことができるのでしょうか？もし、そういうことばが私たちのうちから出ないとするならば、私たちに何が欠けているのでしょうか？私たちは自分の信仰生活を吟味して、パウロと同じように「私を見ならってください」と言えるような信仰者になりたいものです。

そして、パウロは「また、あなたがたと同じように私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」と続けています。最初は「私」という単数でした。今度は「私たちを手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください」と複数形で、また念を押すように、見ならうということのパウロは勧めるのです。この「私たち」にももちろんパウロが含まれていることはわかります。そして、恐らくパウロのほかにも、テモテとエパフロデトの二人が「私たち」の中に含まれているのではないかと推測することができます。それはピリピ2章の後半に、彼らもパウロを見ならい、イエス・キリストを見ならって歩んでいたことが記されているからです。

そして「私たちを手本として歩んでいる人たち」の「手本」ということばは、倫理的に完全な模範のことを言っているのではなくて、目標です。先の3：14でパウロは「目標を目指して一心に走っているのです。」と言いましたが、まさにこの「目標」がここで言われている「手本」です。

その後「歩んでいる」とあります。ユダヤの人たちはヘブル語の「ハラカ」ということばで信仰生活を表しました。その意味は「歩み」です。ここを違う日本語で言い換えるならば、「手本として信仰生活を送っている」となります。そして、そのように私たちを目標として信仰生活を送っている人たちがほかにもいる。だからそういう人たちに「目を留めてください」とパウロが言うのです。この「目を留め」というのは英語の聖書では“take note of”ということば書かれています。これは「注意する」とか、「注目する」という意味があります。だからこの後半のところを違うことばで言うならば、「私たち」——パウロを含めた複数の者たちを目標として歩んでいるほかのクリスチャンがいることにあなたがたは心を向けてほしいと、パウロは願ったのです。

2. キリストの十字架の敵として歩んでいる人々 18-19節

なぜパウロたちはこのように願ったのかというと、それは彼らの信仰の手本、目標がイエス・キリストであったからです。18節は「というのは」ということばで始まっています。17節での勧め——このように歩んでほしい、このような目標、手本を持って歩んでほしいとパウロが願ったその理由がこの後18-19節で記されています。

1) 3：18

「というのは、……多くの人々がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。」とあります。この「多くの人々」というのはユダヤ人であるのか、異邦人であるのか、定かではないのですが、ただ彼らは自称クリスチャンとして歩んでいた者たちです。自分は救われていると勝手に思って歩んでいる者たちがいたのです。この「多くの人々」、彼らは「キリストの十字架の敵として歩んでいるからです」とパウロが言います。

(1) 肉体だけの割礼の者 3：2

彼らはどんな主張をしていたのかと言うと、救われるためには律法を守ることが絶対に必要なのだと主張し、キリストの十字架を否定していたのです。3：2では「肉体だけの割礼の者」という言葉があります。彼らは割礼を受けなければ救われないと主張しているのです。しかし、パウロはからだの割礼ではなく大切なのは心の割礼であると私たちに教えています。

ローマ2：28-29を見ると、「外見上のユダヤ人がユダヤ人のではなく、外見上のからだの割礼が割礼ではありません。かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、心の割礼こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。」とパウロは言っています。「キリストの十字架の敵として歩んでいる」者たちは割礼を受けなければ救われないと主張しました。

(2) 律法による自分の義 3：9

そして3：9には「律法による自分の義」で救われると主張する者たちもいたとあります。彼らは律法を守っているから、自分たちは正しい者であり、だから私たちは救われているのだと主張する者たちでした。

しかし、これが間違いであること、行いによっては、律法によっては救われられないということはパウロが私たちにはっきりと教えています。ローマ3：10では「義人はいない。ひとりもない。」と記されています。また、ガラテヤ5：4では「律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。」とあります。このように、「多くの人々」、自称クリスチャンたちは「キリストの十字架の敵として歩んでいる」とパウロは言います。

2) 3 : 19

そして19節ではこの「多くの人々」、「彼ら」について四つのことが記されています。そのことを見て行きたいと思います。

(1) 「最後は滅びです」——永遠の地獄、永遠の死

この自称クリスチャンたち、彼らも不信仰な者と同じ裁きに遭うということです。それは永遠の地獄であり、永遠の死です。「彼らの最後は滅びです」とパウロは言っています。

(2) 「欲望です」

二つ目が「彼らの神は彼らの欲望」です。この「欲望」ということばは*印がついていて、欄外の注を見ると、腹黒いの「腹」ということばが記されています。これと同じことばがローマ16:18では「欲」と訳されています。そして欄外の注には同じように「腹」ということばが記されています。だから、パウロが言っている「彼らの神は彼らの欲望」ですの意味は、彼らが崇拜しているのは、あるいは彼らにとって一番大切なものは自分の欲望を満たすことだということです。

(3) 「彼らの栄光は彼ら自身の恥なのです」

この「栄光」というのは「神」と同義語のギリシャ語が使われています。ですから、この「栄光」を神と置き換えることが可能です。また「恥」は不道德な行いを指し、彼らは彼ら自身の不道德な行いに身をゆだねているということです。彼らは神に従うのではなくて、自分の欲に従って生きているとパウロは言います。

(4) 「彼らの思いは地上のことだけです」

この「キリストの十字架の敵として歩んでいる」者たちの一番の願いはこの世の楽しみのことだけです。永遠には無関心、どうでもいいのです。彼らはこの地上で楽しく自分の欲望を満たすことだけを考えて生活をしている者です。

◎ 19節のまとめ

「十字架の敵として歩んでいる」者たちの最後は永遠の滅びです。

- ① キリストを敵としている人
- ② 罪を犯し続けている人（罪の中を継続的に歩んでいる者たち）
- ③ この世のことだけが最大の関心事の人
- ④ キリストを受け入れない人（キリストに従わない人）

そういう者たちが十字架の敵として歩んでいるとパウロは述べています。

3) 3 : 18前半

「私はしばしばあなたがたに言って来たし、今も涙をもって言うのですが、」、パウロのこの思いはどこから来ているのか——。自称クリスチャン、自分は救われている者だとして、神の前に正しくない歩みをしている者たちが不信仰な者と同じように滅びに至る、そのことをパウロは非常に悲しんでいます。だから「涙をもって言うのです」。そして、今までもパウロはそういう注意を「しばしばあなたがたに言って来たし」、勧めをしたり、戒めたりしてきたと。そのことは3:2や1:27-30を見ればよくわかります。パウロはピリピ2:12で「自分の救いを達成してください。」と懇願しています。これは、ひとりひとりが霊的に成長してキリストに似た者になってくださいとパウロは勧めているのです。パウロはだれひとりとして滅びに至ることを望んではないということです。自称クリスチャンたちがパウロが歩んでいるように、またパウロの仲間が歩んでいるように歩んでほしいと願っていたのです。

3. 天に国籍を持つ人々 3 : 20 (3 : 18-19との対比)

けれども、そのようなキリストを敵として歩んでいる者たちがいるということを踏まえて、20節「けれども、私たちの国籍は天にあります。」と言っています。18-19節と対比されていることがよくわかります。「けれども」、違うことばで言うと「しかし」です。「私たち」、もちろんこれは救われている者たち、クリスチャンのことです。19節で「彼らの思いは地上のことだけです」とありますが、ここでパウロは「地上」と「天」を対比しているのです。

この「国籍」ということばは非常に大切なことばです。使われているギリシャ語は「ポリテューマ」ということばですが、この動詞形が同じピリピ1:27では「生活しなさい」と訳されています。このことばは市民権を表すことばです。パウロはこの手紙をピリピの人たちに書きました。ピリピはこの当時ローマの植民地でしたが、ピリピに住む人たちはローマの市民権、生活する権利を持っていたのです。だからこの手紙を読んだピリピの兄弟たちは「私たちの国籍は天にあります。」の意味がよくわかったのです。

また、旧約の信仰者たちもこの「天」を仰ぎ見ていたということをヘブル11:13-16で知ることができます。「これらの人々はみな、信仰の人々として死にました。約束のものを手に入れることはありませんでしたが、はるかにそれを見て喜び迎え、地上では旅人であり寄留者であることを告白していたのです。……もし、出て来た故郷のことを思っていたのであれば、帰る機会があったでしょう。しかし、事実、彼らは、さらにすぐれた故郷、すなわち天の故郷にあこがれていたのです。」、旧約の信仰者も自分たちの国籍がどこにあるのかを知っていたのです。現代に生きる私たちも本当の国籍はどこにあるのか、それはパウロが言うように「天」にあるということを知っています。だから旧約の信仰者たちが言ったように、私たちはこの地上に旅人として、また寄留者として住み、また歩んでいるということです。私たちの今いる地上は私たちが永遠に住む場所ではないのです。そのことをペテロは1ペテロ1:17で「あなたがたが地上にしばらくとどまっている間の時を」と記しています。天に国籍を持つ者たちはこの「地上では旅人であり寄留者である」、このように私たちは教えられます。

4. 天国民の生き方

では、「旅人であり寄留者である」者たちはこの地上でどのように生きなければいけないのか、私たちはペテロからその教えを乞いたいと思います。

1) 1ペテロ2:11-12

:11 愛する者たちよ。あなたがたにお勧めします。旅人であり寄留者であるあなたがたは、たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい。

:12 異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい。そうすれば、彼らは、何かのことであなたがたを悪人呼ばわりしていても、あなたがたのそのりっぱな行ないを見て、おとずれの日に神をほめたたえるようになります。

ペテロはクリスチャンに向かって「旅人であり寄留者であるあなたがたは」と記しています。この「旅人」とは自分の真の故郷でない土地に住んでいる者たち、また「寄留者」とは外国の地に一時的に住んでいる者たちのことです。ペテロはここで天に国籍のある者たち、この地上では「旅人であり寄留者である」者たちに一つは否定的な面から、一つは肯定的な面からこのように生きなさいと二つの勧めをしています。

(1) 否定的な面から 2:11

11節「たましいに戦いをいどむ肉の欲を遠ざけなさい」とあります。この「肉の」ということばは「コス」という接尾語が「の」に当たるのですが、この意味するところは「～に属する」とか「～に支配される」という意味です。ですから肉に支配されている、肉に属する欲、まさに罪の性質そのものを言い表しています。ご存じのように、この罪の性質はガラテヤ5:19-21にパウロが詳しく述べています。ぜひ後で見ていただきたいを思います。

そして、ペテロは「肉の欲を遠ざけなさい」と言います。「遠ざけなさい」というのは「離れておく」とか「避ける」ということです。だからペテロはここで罪深い欲望から継続して離れていなさいと言うわけです。なぜなら、それらの「肉の欲」は霊的な「戦いをいど」んで来るからだとしてペテロは言います。ガラテヤ5:16-17に「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。なぜなら、肉の願うことは御霊に逆らい、御霊は肉に逆らうからです。この二つは互いに対立していて、そのためあなたがたは、自分のしたいと思うことをすることができないのです。」と記されています。

(2) 肯定的な面から 2:12

ペテロはまず一つ、「肉の欲を遠ざけなさい」と言いました。罪深い欲望から継続して離れていなさいと教えた後に、二つ目は「異邦人の中にあつて、りっぱにふるまいなさい」と教えます。また後半には「あなたがたのそのりっぱな行ないを見て」とペテロは記しています。この「りっぱ」というのは「他の人の目にとまる魅力的な美しさ」、そのような意味を持ったことばです。「りっぱにふるまい」、「りっぱな行ない」と言うと、私たちはある箇所を思い出します。エペソ2:10「私たちは神の作品であつて、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあつて造られたのです。」、またマタイ5:16ではイエス様は「人々があなたがたの良い行ないを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」とあります。ペテロは「良い行ない」をせよと言っているのです。

そしてそのクリスチャンの「良い行ない」を「異邦人」が見ているということです。この「異邦人」と記されている12節のことばは未信者、まだ救われていない者たちのことです。彼らはクリスチャンの「りっぱな行ない」を見て「おとずれの日に神をほめたたえるようになります」と。信仰者の「良い行ない」を見て、まだ救われていない未信の人たちが悔い改めの心が起こされて祝福が訪れる、救いがその者に訪れる、その日を指してペテロは「おとずれの日」と言っています。未信者の救いの時です。だから、

「おとずれの日に神をほめたたえるようになります」、まさに私たちもそうでした。私たちも救われる以前は、神に敵対する者でした。神をほめたたえることは一切考えませんでした。神を礼拝する、ノーでした。でも救われたその瞬間から、私たちも神をおそれ、神を礼拝する、そのような者へと変えられました。まさにペテロはそのことをここで言うわけです。

◎ 天国民の生き方

ペテロはこの11-12節を通して、天に国籍を持つ者は、この地上でどのように生きるべきなのか、二つのことを教えています。

① 罪から離れる（聖い生き方）

② 良い行ないをする（神が喜ばれる行ない）

2) イエス・キリストの再臨を待ち望む ピリピ3：20-21

ピリピ3章に戻ると、パウロは20-21節でクリスチャンがこの地上でどのように生きるべきか、大切なことを一つ教えています。

(1) 3：20後半

「そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです。」「そこから」、まさに天から、「救い主としておいでになる」。主イエス・キリストの再臨はクリスチャンが完全に罪から解放されて栄光のからだに変えられる、救いが完成する時です。だから、クリスチャンは主の来られること、主の再臨を待ち望むべきだとパウロは言います。ヘブル人への手紙を書いた記者は9：28で「二度目は、罪を負うためではなく、」と言います。イエス・キリストが最初に来た時は、私たちの「罪を負うため」に来られました。しかし「二度目は、罪を負うためではなく、彼を待ち望んでいる人々の救いのために来られるのです。」、まさに救われた者たちが栄光のからだに変えられてイエス・キリストとともに天で永遠を過ごすために主イエス・キリストは再び来られるということです。

(2) 3：21

21節「卑しいからだ」、罪のために汚れたこのからだはキリストと同じ「栄光のからだ」に変えられる、その時だとパウロは言うのです。ヨハネは1ヨハネ3：2で「キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となるのがわかっています。」と言います。パウロがキリストを待ち望むようにと勧めたのは、ピリピのクリスチャンたちの目を地上のことではなくて、天に国籍を持つ者にふさわしく、その目を天に向けさせて、イエス・キリストが再び来られるイエス・キリストの再臨を待ち望んで生きようようにと勧めるためです。パウロはコロサイ3：2で「あなたがたは、地上のものを思わず、天にあるものを思いなさい。」と言います。

3) 生き方のまとめ

私たち救われた者、クリスチャンはこの地上では旅人です。ここは永遠の住まいではありません。私たちがこの地上では寄留者です。ここは永遠の住まいではありません。パウロも、そしてペテロも私たちがこの地上でどのように生きなければいけないのかはっきりと教えてくれます。パウロは私たちが天に国籍を持つ者として主の来られることを待ち望んで生きようにと。ペテロは罪から離れて（聖）、そしてよい行ないをもって（義）と言います。私たちが今、このような者としてこの地上に置かれています。ただ単に私たちが救いを与えられたのではなくて、この地上を生きる私たちに責任があるということです。パウロもペテロもこのように生きなさいと私たちに勧めています。私たちがこの勧めをもって、残されたこの地上での時間がどのくらいあるのかわかりませんが、このように生きる。そこに私たちの喜びがあって、また感謝があるはずです。